あすから自分の足で歩く

第五回三池にまなぶ会に参加して

北海道　斉藤治子さん（21才）の話

一月二十七日から二十九日まで行なわれた第五回三池にまなぶ会に北海道の倶知安（くっちゃん）から参加した斉藤さん（全通）はその感想をつぎのように語った。

〝組合があつても　なんにもならん〟

私が三池にくる動機は、私がひとりで悩んでいるいろいろな問題に、三池労組の「根性」がこたえてくれるだろうと思ったから。

私は北海道の蚊田（あぶた）郡倶知安（くっちゃん）町の小さな郵便局につとめている。

私の職場でも郵政省からの攻撃はなかなか強い。いま郵政省は若い労働者への労務対策として「若い郵政」という機関紙を発行してわれわれに読ませている。

ある日、私の所に郵政省から速達がきて、この「若い郵政」に簡単な原稿を書くように依頼してきた。

私たちが属する全通労組は「若い郵政」に対しては非協力という方針を出していたので、私は組合の方針にしたがって、締切日をすぎても原稿を書かなかった。

締切日がすぎたころ職場に突然東京の「若い郵政」編集部から電話がかかってきた。

「速達はみましたか。なぜ書かないのですか？」

という。私は

「締切日はすぎたのでしょう」

といったら

「締切日はあと二日余裕があるので速達で出してくれ」

という。私は

「書けば書けるが、全通の方針に従って出せないのだ」

というと、むこうは上役とかわった。その上役はいきなり大声で

「だれの指示で原稿を拒否するのか！　幹部の名前をいえ！」

とどなった。私もカッとなり大声でいい争っていた。

気がついてみると、局長が私のうしろに立ってニランでいた。

私は本当に必死になってたたかった。

このことをあとで組合に話したら、「そんなことは当り前だ」といって片付けられてしまった。

たしかに当然ありえることだろうが、私が一人でがんばって、たよれるのは組合なのに、それが「当り前だ」でつっぱねられたときはがっかりした。

組織、組織などといっても結局個人で、一人でたたかう以外にないのなら、こんなだらしのない組合なんかなくてもいいじゃないか、そんな気持さえしていた。

抽象的な説教だけ

郵政省は一定期間、ある人員をしぼって青年職員訓練というものを実施している。

ある日、私にもこの訓練に参加するように業務命令があった。これに対しても組合はどう対処していいか、なんの指示もしてくれない。

私がたずねに行ったら

「自分の気持さえしっかり持っていれば、行ってもいいじゃないか」

などとノンキなことをいう。

これが若い組合員に対する攻撃であり、それにどう対処するかなどということは少しも議論もしてくれない。こんな組合なんかなんの意味があるのだろうか、とさえ思った。

アタマだけで考えていた私

こんな私が三池にきて、泊ったのは宮原の吉田さんという家だった。地域分会の交流や家族の人との交流で、本当に組合員や主婦会員一人ひとりが仲間のことをよく知り抜いているということにおどろいた。

仲間の長所も欠点も知り、ほんとに友だち以上のつき合いだ。それが口先だけでなく、切実にそうだ。一人の主婦は「父ちゃんのイトコが第二に脱落したとき、親せきやなんかからいろいろと説得をうけた。父ちゃんだけは安心してきやなんかからいろいろと説得を闘えるように、私はグチをこぼさないように頑張っている」と語っていた。

これを聞き、その主婦たちをみたとき、私は自分でも全通の中でやること、できることが、まだたくさんあるということに気がついた。私はいままで、つねに受け身だった。本の上で学んだことをひきくらべて、ああでもない、こうでもないと現状を批判していたように思う。

私はいまから職場の仲間たちに個人と個人という立場で、相手の気持ちをくみとる努力をしたいと思う。私にもできることがたくさんある。まず、明日から自分の足であるき、相手の気持ちの中に入っていこう。私は三池にきて、そう決心した。（一月二十九日談）

1月27日の「第5回三池にまなぶ会」開会集会

狙いは軍国主義強化

断じて許せぬ〝紀元節復活〟

大地評はきたる十一日、全国の統一行動に足並をそろえ、政府・独占がめざす紀元節の復活に反対する行動に立ち上がることになった。

再度軍国主義政策の確立・強化をめざすわが国の支配層は、科学的な何の根拠もないのに、すでに早くから二月一日を建国記念日にすることをたくらんできた。今年は祝うべき「明治開国百年」に当たる年だとして、神社本庁を中心に郷友連盟（在郷軍人の会）、生長の家、右翼や国粋団体、宗教団体が手を結んで、〝奉祝国民大会〟まで開催するという。

それにしても今年度の自民党の運動方針は、驚くべき内容を含んでいる。「明治の先覚は……富国強兵政策を、一貫した国是として国家建設の基盤にした」として、「民族精神と道義の昂揚」をめざすという。紀元節復活の意図は実はそこから生まれてきているもので、明らかにいま一度国民を戦争への道にひきずりこもうとのねらいが歴然としている。断じて紀元節の復活を許してはならない。

〈春闘用語解説〉

ガイディング・ライト

資本家の労働対策機関である日経連が提唱したものです。例年日経連が「賃上げの限界」をしめしていましたが、説得力を欠いたので「第三者機関に〝賃上げ〟の限界〟をしめさせる」というものです。公平をよそおった賃金統制機関をつくり、賃上げを〝国民経済の実質成長のわく内にとどめる〟ことをねらっています。また公務員賃金の統制を要求していますが、すでに政府は四十三年度の公務員賃金は物価上昇率の四・八％アップにおさえようとしており、全労働者の賃上げ闘争に〝足かせ〟を加えています。だから国家権力を利用した賃金抑制と賃金統制に道を開くことがねらいです。

【KNA】

資本論刊行百年
ロシア革命五十年

記念講演会

表記の事業を記念して、労働大学大牟田分校主催で大講演会が催される。

講　師＝佐々木更三（前社会党委員長）
「日本における社会主義運動の歴史」
中野好夫（評論家）
「日本文学にみる青年像」
コマロフスキー（ソ連大使館書記官）
「ロシアにおける社会主義の発展」
向坂逸郎（社会主義協会）
「明治維新と資本論」

とき＝二月二十六日（月）午後六時より

ところ＝大牟田市民会館

整理券は組合本部内、労働大学大牟田分校にあります。

女子社員募集

昨年から三池の子弟が多数採用されていますが、本年度も高卒女子をぜひ採用したいと、このほど連絡がありました。

募集期間は三月中までとなっていますので、希望者は本部か支部の担当者に問合わせてください。

大阪フナイ薬品

労働者を〝ゴウ問〟にかける

西鉄バス荒尾で不当な攻撃

『料金ごまかした』と

朝日新聞（昭和四十二年十一月および十二月）がつたえるところによると、西鉄バス大牟田営業所荒尾営業区では、昨年十月末ごろからバスの運転手や車掌三十人ちかくを会社側が「切符の売上げ金をゴマ化したろう」と取調べ、旅館などにカン詰して「口述書」に印をつかせるという事件が続発している。

なかでも、まったく無実の組合活動家に対して「証人がいる」という一方的ないいがかりで処分をし「ドロボーのヌレギヌをかけて放り出す」という、まったく常識では考えられないような暴挙を行なっている。

これは、CO患者に「組合原性病」というレッテルをはり、放り出す政府や三井鉱山とまったく同じやり口であるが、このような暴挙を許さないために西鉄労組では調査団をつくって調査中であり、またこの事件は西鉄労働者ばかりでなく、多くの人々に反響をよんでいる。

〝人権侵害だ！　と訴え

取調べをうけた人々のうち、無実を主張する前原義信さんら七名は十二月二十一日〝人権侵害だ〟と福岡法務局柳川支局に会社側を相手どり訴えた。

会社側のとり調べの内容は、つぎのようなものだという。

昨年十月末から会社側は一人ひとりを呼び出し、旅館の一室にとじこめ、短い人で八時間、長い人は十五時間四十分も四、五人から十数人の労務係などがとりまき、「お前は売上げ金をゴマ化した」「証人もいる、早く白状しろ」とくり返し大声でどなり、テーブルをたたくなどして脅迫した。

このような状態が二日、三日とつづけられるうちに、いいかげんヤケクソになって、「人をドロボーあつかいにする会社に未練はない。会社はこっちから辞めるので帰してくれ」というと、「自分一人で辞めようたって、そうはいかんゾ。白状して他の人のことをいうまでは帰さん」と、おどすことが再三であった。

一分でもはやく、その場から逃げ出したい一心から、ウソの口述書（会社がつくったもの）に印をおさせられた人もいる。

また、中には長時間の取り調べの中で身心ともにつかれはて、ついに発熱した人もいる。

会社はその人さえ帰さずに、医者をよび、注射をさせ、さらに取り調べるというゴウ問そのままのことさえやっている。その上、その人に対しては翌朝の八時から車で迎えに行き、身も心もクタクタにつかれさせ「口述書」に印をおさせるという例もあった。

大合理化の前ぶれ

また、昨年十二月一日付の朝日新聞によると、西鉄は第二次五カ年計画を発表し、一層の電車、バスのワン・マン化、千人のクビ切り、電車・バス料金の値上げ（一五％から二〇％）を計画している。

労働者にいわれもないヌレギヌをきせ、ドロボー扱いをして放り出すというこの事件は、そのような大合理化計画の不気味な前ぶれであろう。われわれは、この立ち上がった七人のささやかな努力に拍手を送ろう。

大牟田でおきた西鉄バスの事故。この責任も労働者の「不注意」で片付けられてしまつた。